秀村文庫、フランスへ飛び立つ

草野真樹

二〇二一年四月十五日、秀村選三先生（九州大学名誉教授／『西日本文化』編集顧問）がお亡くなりになった。秀村先生から指導を受けた方、研究と仕事を共にされた方、資料調査で交流を深められた方たちはいったいどれくらいにのぼるだろうか。大学・学界での研究活動にとどまらず、「民学協同」を熱心に実践された秀村先生の活動・交流の場はじつに広大であった。

通常ならば、ご親族とともにそうした数多くの関係者が天国へお見送りしたはずであった。しかし、コロナ禍にあって、残念ながらそれは叶わず、葬儀は近親者だけで営まれた。ただ、田中直樹先生（日本大学名誉教授）と東定宣昌先生（九州大学名誉教授）のみ関係者を代表してご参列された。

田中先生からお聞きするところによると、ここで秀村先生が永きにわたり収集された膨大な蔵書（以下、秀村文庫と呼ぶ）をどのようにすべきか話題にのぼり、ご家族と近しい関係者らが相談・協力しながら活用の途を探っていくことで話はまとまったという。

日本の研究者は欧米の研究者と異なり、本を自分の手元に置いておくことを好むと言われる。秀村先生は、研究資料はもちろんのこと、本を手元に置くことをたいへん好まれた大の図書収集家でもあった。したがって、秀村文庫は、先生の永年の研究活動と問題関心を間接的に反映する「知」の蓄積でもある。換言すれば、秀村文庫の活用は、その知の蓄積をいかに継承していくか、という問題でもあったのである。

本来的に、図書館は人類の活字資料と文化を蓄積して活用する知の社会基盤である。かつては、図書館に蔵書コレクションを引き取ってもらい、「〇〇文庫」などと寄贈者の名を冠して、再び活用に供されることもそれほど稀なことではなかった。しかし、近年、図書館をめぐる動向は大きく変化している。「活字資料を蓄積・活用する場」としての本来的役割に加えて、「地域の課題解決・調査研究の場」「まちづくりや地域の振興・活性化としての場」といった新たな役割や付加価値の創出を期待されるようになった。

しかし、社会のニーズは多様化する一方、図書館運営費と図書収蔵スペースは限られている。少なくとも、近年では図書館が研究者から蔵書コレクションをやすやすと引き取ることはむずかしい状況にある。実際、秀村先生ご自身、実兄である欣二先生（東京大学名誉教授）の蔵書の活用先をとても苦心して探されたと秀村先生から直接お聞きした記憶がある。

そのような状況もふまえつつ、秀村文庫の活用を打診した一つがフランスのアルザス日本研究センター（Centre Européen d'Etudes Japonaises d'Alsace. 以下、CEEJA と略）であった。CEEJA は二〇〇一年に経済、文化、観光、学術の分野で日本との交流を深めることを目的として設立された民間団体である。

CEEJA では上記目的のもと、さまざまなプロジェクトを実施されているが、日本の書籍を収集するヨーロッパで最大規模（十三万冊）のライブラリーを有する組織でもある。CEEJA と日本の窓口はE・パウアー先生（Erich Pauer／マールブルク大学名誉教授）とR・マティアス先生（Regine Mathias Pauer／ボーフム大学名誉教授）ご夫妻にお引き受けいただいた。秀村先生はマティアス先生が日本留学されたときの指導教授であり、その良き師弟関係は変わることなく続いておられた。ま

た、パウアー先生とマティアス先生は長年の研究活動においてヨーロッパと日本の交流・協力促進に熱心に取り組んでおられ、現在もCEEJAにおいてボランティアとして仕事（図書館管理）に取り組まれている。パウアー先生は二〇二三年初めまでCEEJA日本研究担当の副所長であり、現在、その役目はマティアス先生が担当されている。そのような縁に支えられつつ、ヨーロッパで秀村文庫を活用する途が拓けたのである。

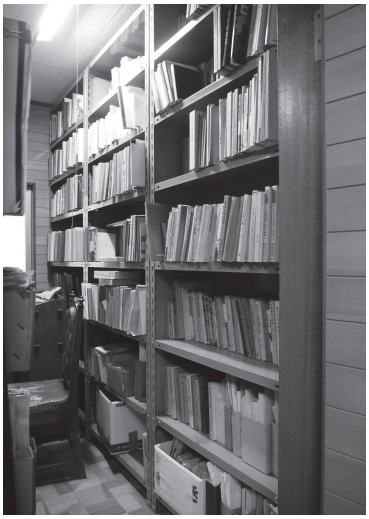
ボーフム大学の学生を引率して来日したR・マティアス先生（2009.9.15）
後列で手を取り合っているのが秀村先生（右）とR・マティアス先生

だが、図書館が抱える蔵書受け入れの問題は万国共通である。CEEJAライブラリーでも限られた収蔵スペースと運営予算のなかで、いかに充実した蔵書群を構築していくか、スタッフの方々は長期かつ効果的観点から運営に尽力されている。その場合、まず書籍の重複は避けたい。近年のCEEJAライブラリーによる収集では、スタッフら関係者自らが日本を訪れ、受け入れ書籍の選別を行い、効果的な収集を進められているという。

しかし、今回はコロナ禍での渡航制限により訪日は困難であった。そこで、いくつか指定された条件のもと、われわれ日本側の関係者で選別・箱詰め・梱包・発送までを行うことになった。条件とは、第一に日本語で書かれ、かつ日本をテーマにする書籍であること、第二に、第一条件を満たす書籍であっても、文学作品、文庫本、新書本、随筆類は除外することであった。また、出版から相当な年月が経ったものや傷みのあるものも除外した。

なお、上記の条件で選別したとしても、日本で重複本を確認して除外することはできないが、CEEJAライブラリーでの受け入れ後に重複が判明した書籍はヨーロッパのその他のライブラリーで活用される見通しも立ち、その点の心配はなかった。

図書館の誇るべき指標として蔵書数がある。しかし、長期かつ効果的観点に立てば、



秀村家2階書斎奥の書架

秀村家での整理作業風景

蔵書数ばかりに注目する必要はない。条件に挙げられた日本文学については、近隣のストラスブール大学をはじめ他のライブラリーにも収蔵されている。したがって、CEEJAライブラリーでは人文科学、社会科学すべての分野を収集対象としながら、とくに経済学、経営学、法学、民俗学、地域史などに関する書籍を積極的に取り揃えられている。

希望する十分な図書館運営費が望みにくい場合、近隣図書館との資源蓄積の共有化（分担収集、共同保存など）は効果的な方法の一つである。こうした近隣図書館との協力・連携体制の充実は近年の日本も同様であり、大学図書館、公共図書館、学校図書館、専門図書館などの各種図書館が設置主体の垣根を超えて多元的ネットワークをむすび、その協力・連携を活用した各種サービスの提供も志向されるようになっている。

さて、関係者で先述の条件を共有し、秀村家での整理作業を四回目の緊急事態宣言が解除された二〇二一年十月から開始した。しかし、いざ秀村先生のご自宅にお伺いすると、ただただ圧倒されるばかりであった。秀村先生のご自宅は、二階建て木造建築による居住部の母屋とのちに増築された二階建て書庫・書斎とが縁側の廊下でつながる構造をしており、すべての部屋ならびに書庫・書斎が書籍と研究資料で占められていた。

書庫・書斎の一階部分は天井の高さいっぱいに組み立てられたスチール書架が整然と並び、二階は六畳ほどの書斎に机が置かれ、その奥にもスチール書架が並ぶ書庫が設けられていた。晩年は居住部母屋の一室を書斎とされておられたが、いずれの部屋にも研究資料と書籍がぎっしりと並べられ、廊下の壁には手作りの本棚が増設されていた。玄関も例外ではなく、靴箱に代わって本棚が占拠していた。庭の倉庫を開けると、書籍が詰まった段ボールで隙間なく埋められていた。

生涯を学問に捧げられた秀村先生の生きかたが凝縮された光景であった。われわれはその光景に圧倒されつつ、作業スペースを確保することから始めた。

秀村文庫は国やジャンルを問わず、広く歴史全般を対象として膨大な冊数を数えたが、とくに秀村先生のご専門である経済史を中心としつつ農業史、労働史、産業史、部落史、地域史、自治体史（誌）、各種資料集はたいへん充実していた。

秀村先生は『福岡県史』の編さんを永く牽引されたが、とくに地域史に強い関心を持ち続けられ、九州はもとより広く全国の自治体史（誌）と各地の古文書を復刻した資料集も熱心に収集され、秀村文庫の重要な一角を占めていた。また、秀村先生は学徒動員により海軍に従軍されたが、戦争で旧制福岡中学、旧制福岡高校時代のご友人を多く亡くされた。書架には特別攻撃隊に関する書籍や資料集も多数集められていた。

それらの書籍を手分けして整理選別、箱詰め・梱包、記録（写真撮影）、段ボールの集約といった作業を繰り返し進めていった。先述の条件のもと、われわれなりの適宜の判断も加えながら選別作業を行った結果、書籍は段ボール二五〇箱ほどになった。

二〇二三年一月二十五日、秀村文庫は日本

フランス・アルザス地方のコルマールに到着した秀村文庫（2023. 2. 10）

郵便の航空便でフランスへ飛び立った。いずれCEEJAライブラリーのインターネット専用ポータルで紹介される日がくるだろう。すべての書籍とはいかなかったが、秀村先生の知の蓄積について継承の橋渡しができたのではないか。とするならば、この作業に参加できたことをたいへん光栄に思う。

（付記）多大なるご理解とご支援をいただきましたE・パウアー先生とR・マティアス先生に深く感謝申し上げます。秀村家での作業では、秀村冠一様、秀村研二様、橋本謙二・真理子様から種々ご配慮をたまわり、たいへんお世話になりました。また、田中直樹、東定宣昌両先生のほか、作業に参加した関係者は以下のとおりです（五十音順、敬称略）。

今野孝、江藤彰彦、梶嶋政司、草野真樹、古賀康士、西村卓、服部民子、諸原真樹、八嶋義之、山口信枝、山田秀。

最後に僭越ながら作業に参加した一人として本文を記しましたこと、故秀村先生はじめすべての関係者の皆さま、何卒ご寛恕くださいますようお願いいたします。

くさの　まさき・九州産業大学商学部
准教授